

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號五第 卷六十四第

行發日一月五年三十和昭

論叢

貨幣と利子……………文學博士 高田保馬

支那農業の片影……………法學博士 財部靜治

ソロキンの^{社會的}過程形式論の評價……………文學博士 米田庄太郎

貨幣の本質とその價值……………商學士 中山伊知郎

時論

物價騰貴と消費節約……………經濟學博士 谷口吉彥

研究

再保險形態の究極的發展……………經濟學士 佐波宣平

中立貨幣と外國爲替相場……………經濟學士 中谷實

ダンピングの理論……………經濟學士 岡倉伯士

說苑

幕末の上海貿易……………經濟學博士 本庄榮治郎

差額地代と限界生産力說……………經濟學士 上村鎮威

附錄

雜報・外國雜誌論題

(禁轉載)

差額地代と限界生産力説

上村 鎮 威

一

吾々の主題は、リカードの差額地代論を一般均衡理論的に把握して、それと限界生産力説との關聯を明らかにすることにある。手近なところから始めるために、先づ彼の地代概念から見て行かふと思ふ。周知の如くリカードは、「地代……は土地の本源的にして不可壞なる力 (the original and indestructible powers of the soil) の使用に對して地主に支拂はれる報償である」¹⁾と定義する。一見して明らかやうに、この定義は何等眞の誤解をも生ぜしめることなしに近代理論における地代概念に直接に連つてゐる。何となれば、「土地の本源的にして不可壞なる力」といふ表現は、それ自身固有の生産力を有し従つて何等の補償を必要としないところの原本生産財としての土地の特質を極めて明瞭に示しており、右の定義においてリカードに缺

たるところはたゞ地代が支拂はれるのは正にかゝるものとしての土地が供給する用役、即ち土地用役に對してであるといふことを明文を以て示さなかつたことにすぎないからである。なほまたこの關聯においてリカードにおいて既に「賃料財」(Rentengüter)の觀念が存することも指摘されてよいであらう。²⁾ しかれば地代は何故に支拂はれるか、リカードはこれに答へるに土地用役の稀少性を以てする。即ち、土地が空氣や水の如くその量において無限であるならば、何人も地代を支拂はぬであらうといふのである。³⁾ この命題は、これを正當に解すれば、土地用役の限界生産力が零であることの意味するが故に、その限りに對しては近代地代論の中核に觸れる内容をもつものと言へる。しかし不幸にしてリカードはこの命題をこれ以上發展せしめてゐない。理論のこの方向においては、彼は自らの價值論に餘りにも強く影響されてゐる。即ち彼が他方において價格は效用と稀少性とを有する勞働の生産物につきてのみ存すると述べる⁴⁾とき、既に地代が價格であることす

1) Ricardo; Principles of Political Economy and Taxation, edited by E. C. K. Gonner. p. 46. 小泉氏譯岩波文庫版 49頁。
 2) Ricardo; *ibid.*, p. 247. 邦譯 257頁。
 3) Ricardo; *ibid.*, p. 46. 邦譯 49頁。
 4) Ricardo; *ibid.*, p. 6. 邦譯 8頁。

ら否定されてゐるのである。さうしてこのことがまた、彼において地代が支拂はれるのは單に土地が私有されるからであるといふアダム・スミスと同様なる見解の見出される理由でもあるであらう。この見解は自明ではあるが、しかし何ものをも説明しないといふことは、茲に絮説を要しない。

しからばリカードの地代論は近代理論的性格を有しないのであるか、さうではない。特殊の形式においてはあるが、まさしく近代理論的に展開されてゐるところがこれがまた彼の價值論の影響の下に成立したる事柄である。この關聯はリカードの地代論を把握するに際して極めて重要であるから、やゝ立入つて論じなければならぬ。

二

周知の如くりカードの價值論は、均衡においては生産物の價格はその生産費に等しいといふ所謂費用法則を言ひあらはす命題を特殊の假定によつて單純化することから成つてゐる。その假定は、當面の問題にとつ

て必要な限りについてこれを要約すれば、次の六つに歸せしめられる。(一)生産係数が a priori に一定であるといふ假定、(二)勞働の單一にして同質なることの假定、(三)勞働の生産係數と資本財のそれとは比例するといふ假定、²⁾(四)土地の生産係數は無視されるといふ假定、(五)生産期間は一定であるといふ假定、⁴⁾(六)固定資本財は捨象されるといふ假定、⁵⁾がそれである。成程これらの假定の上においてあるならば、生産物の價格は「その生産に必要な相對的勞働量」(the relative quantity of labour which is necessary for its production) 即ち「勞働の生産係數比率」によつて決定せられ、勞銀および利子の大小は毫もそれに影響しないといふリカードの相對價值 (relative value) 論の中心命題は許容せられるであらう。(生産費方程式組織を想起せよ。)⁶⁾しかしこの命題が眞實の世界に妥當するためには假定の性質が餘りにも不自然である。第一に、勞働の生産係數比率が生産物價格の原因であるとするならば、それは何よりも先づ一切の價格から獨立に定まるある大いさで

1) Ricardo; *ibid.*, chap. I. sect. II.
2) Ricardo; *ibid.*, chap. I. sect. III.
4) Ricardo; *ibid.*, chap. I. sect. IV. V.
5) Ricardo; *ibid.*, chap. I. sect. IV. V.
6) Ricardo; *ibid.*, p. 5. 18. 邦譯 7頁、22頁。
7) 高田博士; 利子論、281頁 參照。

なければならぬ。リカードはこれを技術が決定するものと考へたのであるが(生産係数を *a priori* に一定であるとする第一の假定がこれに照應する)、しかし「技術」が一應これを與へるとしても、「經濟」はその選擇を要求する。さうしてこの選擇に際して生産物ならびに生産財の價格が前提されねばならぬことはいふまでもない。従つて生産係数が *a priori* に所與であるといふリカードの假定は許されず、同時に勞働の生産係數比率が生産物價格の原因であるといふことも許されぬ。リカードの價值論は單にこの一事を以てするも覆らねばならぬのである。第二に、リカード自身が屢々さうしてゐるやうに、生産物價格が勞働の生産係數比率に比例すると主張するとしても(茲ではもはや兩者の因果關係は語られてゐない)、それは少なくとも第二、第三、第四の假定が論證せられ得る限りにおいてであり、しかもこれらの假定は一つとして論證せられ得るものではない。

(第四の假定に關しては後に論及する)

ところがリカードは分析を簡單ならしめるために今

一つの單純化を行ふ。即ち、貨幣金の生産に必要な勞働量を一定不變であると假定することによつて、生産物の價格は今や専らそれ自身の勞働の生産係數の大小によつて決定されると主張する。⁸⁾ 彼の眞實價值、(real value) 論がこれである。この理論の弱點は、第一に金の生産が一切の經濟的諸量から獨立に行はれるとすること、第二に、技術といふ與件の變動(これによつて勞働の生産係數の大きさが變動する)が、何等の媒介なしに價格の變動と結び付けられてゐること、に存する。さて吾々はかくの如きリカードの價值論をそのまゝ許容することにして、それと彼の地代論との關聯を問題としよう。さうすると次の三つの事柄が明らかである。

(一) リカードは土地の生産係數を無視するのであるが、このことは同時に地代を無視することを意味するから、彼の生産費概念の中には地代が含まれぬ。

(二) しかるに地代は價格以外の何ものでもないから、リカードにしてもし地代を説明せんとするならば、彼

8) Ricardo; *ibid.*, p. 38. 邦譯 41頁。

は何よりも先づ生産物價格の騰貴を問題としなければならぬ。でなければ地代は存在の餘地をもたぬ。しかし相對的な生産物價格即ち所謂相對價格の一般的騰貴を問題とすることはナンセンスであるから、議論は結局特定の生産物の價格騰貴に限定せられねばならぬ。

逆説的に言へば、リカードにとつてはすべての生産物の價格が地代を含んではならぬのである。彼において地代が穀物についてのみ存し、さうしてそれが穀物價格の騰貴と相關聯して説明せられてゐる根本の理由はこゝにある。なほこれについては、穀物價格の暴騰せる當時のイギリスの事情、農産物以外の生産物に關しては地代を問題とする實踐的意義が存しないこと等も考へ合はされてよいであらうが、しかしもとよりこれは理論にとつては全くどうでもよいことである。ところで特定の生産物の價格がそれ自身に關する原因によつて、他の生産物價格に何等の影響を與へることなしに騰貴するといふことも亦ナンセンスであるが、リカードにとつては正にこのことが言はれねばならぬ、即

ち彼にとつては穀物價格のみが騰貴して、他の生産物價格は不變に止まらねばならぬが故に、彼は結局穀物それ自身の勞働の生産係數の増大によつて地代を説明しなければならぬ。吾々はこゝにおいてリカードがその眞實價值論を巧妙に援用してゐることを見るのである。

(三) 他方においてリカードの價值論は、他の表現を以てすれば、生産物價格が地代を含まざる生産費によつて決定されることを意味するから、リカードは最後に地代を含む穀物價格が地代を含まざる生産費によつて決定されることを論證しなければならぬ。

かくてリカードの價值論と地代論との關聯は明らかである。彼も亦以上の三つの事柄を中心として地代論を展開するのであるが、しかしそれは當然に價值論の誤謬に影響されねばならぬ。先づ問題となるのは、土地の生産係數を無視するといふ假定に關する誤謬である。

三

リカードが何故にこの假定をとらねばならなかつたかについては、茲に多くを述べる必要はない。それは、彼が生産係數比率の單純化を「勞働還元」といふ方向において遂行したことの結果たるにすぎない。ところがこの假定によつてリカードの地代論はその存立の根據を奪はれる。何となれば、土地の生産係數を無視してのみ價值論が生き得るのであれば、地代が問題とされるや否や價值論は倒れねばならぬからである。従つてもしリカードにして首尾一貫せんとすれば、彼はその地代論を放棄せねばならぬはずである。これがリカードがその地代論を展開するに當つて遭遇する最初のそして最大の困難である。ところが彼は巧みにこの困難を回避する、こゝでリカードに重大な影響を與へたものは、當時の殖民地の事情である。新しき殖民地においてははじめ地代が存せず、後に人口増加、農産物の商品化等の事由によつて地代が発生したであらうことは吾々の容易に想像し得るところであるが、かゝる事情を眼前に眺めたりカードは直ちにこれを言はゞ歴史

の一般的行程に押し移しさうして自己の價值論と巧妙に結合せしめた。即ち先づ地代の未だ發生しないところの「地代なき社會」においては自己の價值論は十全に妥當すると考へたのである。さうしてかくて先づ一應價值論の妥當性を確保したる後に更めて地代を問題とせんとするのである。彼がその「地代について」の冒頭に掲げた問題提起は明らかにこの事情を物語るものであると言はねばならぬ。曰く「土地の私有と従つて起る地代の發生とは、果して生産上必要なる相對的勞働量と無關係に財の相對價値に變動を生ぜしめるや否や¹⁾と。この行論は極めて巧妙ではあるが、しかし吾々はこれが理論に對して有する意義を疑ふ。成程當該社會において現に地代が存しないならば、土地の生産係數を無視するといふリカードの假定は、言はゞ事實によつて立證されるが故に、他の諸假定を措いて問はなければ、彼の價值論は一應眞實の世界に妥當すると言ひ得るであらう。けれども道はこれより先へは通じない、もし何等かの理由によつてその社會に地代が発

1) Ricardo; *ibid.*, p. 44. 邦譯 47 頁。

生したとすれば、右の假定は逆に事實によつて否定されるが故に、リカードは再び最初の困難に遭遇しなければならぬ。問題は地代が現に存するか否かにあるのであつて。それが如何にして生じたかにあるのではない。シュンペーターの言葉を以てすれば、リカードがこゝで「概念上の再建」と「歴史的な發生」とを混同してゐることは明らかである。²⁾

しかるにリカードは、進んで「地代なき社會」においては優良地のみ耕されるといふ命題を卒然として提出し、³⁾これに人口の増加は穀物の増産を要求するといふ今一つの命題⁴⁾を結び付けることによつて、地代論展開の全基礎をつくり上げる。しかしかゝる命題の理論に對する意義も亦極めて疑ははしい。第一に、地代なき社會——もしかゝる社會があつたとすれば——において優良地が耕作されるか否かは専ら事實に關することであつて、理論にとつてはこれは全くどうでもよいことである。既に地代が捨象されるのであれば、如何なる土地が耕作されるかは總じて問題でないであらう。

それは勞銀が捨象される場合、如何なる勞働が用ひられるかゞ問題でないのと同様である。第二に、人口の増加が穀物の増産を要求するといふ命題についても同様のことを言ひ得る。實際上の傾向法則としては何人もこの命題を認めねばならぬであらうけれども、しかしそれは何等論證され得る性質のものでもなければ、また地代決定に際してかゝる命題が前提される必要は存しないのである。しかしすべてこれらのことは餘り重要にとらるべきではない。重要なのはむしろリカードの以下の所説である。吾々はそれにおいて彼の地代論の近代理論的な性格を明瞭に看取することが出来るのである。

さてリカードによれば、地代なき社會においては優良地のみ耕されるが、人口の増加は穀物の増産を要求するが故に、他の事情にして一樣であるならば、耕作は劣等地へ進行し増加せる穀物需要量を充すに及んではじめて止む。かくて優良地と劣等地と並び耕されることになるのであるが、兩地はその生産力の差の故に同

2) Schumpeter; Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung, 2 Aufl. S. 10.

3) Ricardo; *ibid.*, p. 49. 邦譯 53頁。

4) Ricardo; *ibid.*, p. 47. 邦譯 50頁。

一量の資本・労働を投下するもその收穫量を異にする。ところが穀物賃銀は他の關聯において豫め一定せる大いさであるから(自然賃銀説⁵⁾)兩地の收穫量の相違は今や純收穫(Net produce)即ち利潤の差として現はれる。しかるに農業資本に二つの利潤率はあり得ないから、優良地の超過純收穫量は地代を構成する。他方において劣等地に資本が投下せられる傍ら優良地に追加資本が増投せられるのであるが、所謂土地收穫遞減の法則(Gesetz des abnehmenden Bodenertrages)の作用によつて各資本毎に同様にして純收穫の差が存するが故にこの場合にも亦地代が成立すると⁶⁾。

このリカードの敘述において吾々の注目すべきことは、それが耕作は穀物賃銀を償うてなほ一定の餘剰を生ずるところまで進行しそれ以上にも進まなければそれ以内にも止まらぬといふ意味内容を含んでゐるといふことである。蓋し、これは事實上生産の限界においては賃銀は労働の割引せられたる限界生産力に等しいといふ近代の限界生産力説の中心命題に同じであるか

らである。(吾々はこの場合次のことを注意する必要がある。リカードは「同一量の資本・労働」といふ表現を用ひてゐるけれども、彼においては生産要素としての資本と利子の基體としての資本との區別が明らかでなく、また「生産における時間要素」Time-element in productionも少なくとも地代を取扱ふ範圍においては全く考慮されてゐないといふことがそれである⁷⁾)。従つてこの關聯においては、人口の増加が穀物の増産を要求するといふリカードの命題は、企業者(entrepreneur)にとつてその生産すべき穀物量が與へられてゐることを意味し、また穀物賃銀が他の關聯において豫め一定せる大いさであるといふことは、彼にとつて同様に賃銀が與へられてゐることを意味するものと解せられる。それ故にまほし穀物價格にして與へられたるものであるとすれば、リカードの差額地代論は直ち近代理論的内容を獲得し得る。何となれば、賃銀が労働の割引せられたる限界生産力に等しきところまで生産が擴張せられたとすれば、雇傭労働者數は一定し、従つてまた賃銀總額も一定する(假定によつて賃銀は一定

5) Ricardo; *ibid.*, p. 70. 邦譯 74 頁。

6) Ricardo; *ibid.*, pp. 47-49. 邦譯 49-52 頁。

7) Wicksell; *Lectures on Political Economy*, Vol. I, translated by E. Classen, 1935. p. 118.

である)が故に、生産物總價額(これも假定によつて一定である)から勞銀總額を差引ける所謂殘餘所得 (residual income) としての地代並びに利子の總計が一定の大いに定まり、さうしていま利子が豫め與へられたるものであるとすれば、終局的に地代が一義的な大いに定まるからである。(いふまでもなくこゝでは所謂「資本なき生産」non-capitalistic production が前提されてゐる。)さうして「穀物が高價なのは地代が支拂はれるからではなく、穀物が高價だから地代が支拂はれるのである。」といふリカードの命題は右の關聯においてのみ正當に理解されるであらう。かくて吾々はリカードの差額地代論は「殘餘説」として近代理論的性格をもつものであると言ひ得る。⁸⁾

ところが殘餘説としての地代論が當然陥らねばならぬ運命ではあるが、リカードにおいては地代はそれ自身如何なる大いに定まるか、更にまたそもそ／＼地代は何故に支拂はれるかといふことは終に明らかでない。吾々はこゝに再び彼の價值論の誤謬が執拗につき

まつてゐることを見出す、即ち前者は彼が生産係數を a priori に一定とすることの當然の歸結であり、後者は彼が地代を生産費の中から除外することの結果である。實際、地代が生産費の中に含まれぬとすれば、それはもはや與へられたる所得範疇ではなくして、言はゞ導出さるべきそれである。従つて地代ははじめから地代であることは出來ず、他の何等かの所得の中に含まれるより外に存在する餘地をもつはずはない。リカードにおいてははじめ地代が利潤の中に含ましめられ、後に利潤率平均によつて獨立の所得に轉化せしめられるのは正にこの故である。更に吾々はこれに關聯してリカードが地代の増大を利潤率低下の過程であるとして言はゞ動態的に把握してゐることを指摘する必要がある。このことは究極においては、地代をば穀物價格の騰貴によつて説明することを餘儀なくせしめる彼の價值論の誤謬に基づくものであることは明瞭であるが、しかしこのことは過程のメカニズムに觸れることなしに直ちに事が究極において歸着すべき結果を示す

8) Wicksell; Lectures, pp. 116-118.

9) Ricardo; *ibid.*, pp. 47-48. 邦譯 50-51 頁。

といふ彼の方法の特徴を想起するならば、何等眞の誤解をも生ぜしめないであらう。最後に吾々が右において所與であるときみなした穀物價格は、リカードの價值論の要請に従へば逆にその大いさが説明さるべきものである。しかしもしさうであるならば、生産の限界がそも／＼何處に定まるべきかは不明ならざるを得ない。¹⁰⁾ これまた彼の價值論が地代論に與へる不都合である。周知の如くシユムペーターは正にこの視角において、リカードの地代論が有する一切の近代理論的性格を廢棄するのであるが、¹¹⁾ 體系の統一性乃至一義性を重視する彼がかく主張することに不思議はないとしても、少なくとも事を地代論に即して見る限りこの見解は餘りにも破壊的であるやうに思はれる。

四

かくて要するにその價值論より來るあらゆる不都合にも拘らず、リカードの地代論はその中核においてはまさしく近代理論的である。吾々は進んでこの内容を定式化することによつて、右の所論を擴充しようと思

ふ。さうしてこのことは、吾々が以上においてリカードの地代論に加へた諸解釋の外に、たゞ地主が企業者であるといふ假定を附加へることによつて容易に達せられるのである。

$$(1) P = P_1(n_1 + n_2 + \dots + n_n) + R$$

P は穀物價格、 n_1, n_2, \dots, n_n は地主の所有する n 種の土地の各一定面積の上にそれ／＼用ひられる労働者數、q は n 種の土地において生産される穀物總量、R は同じく n 種の土地の總地代、l は勞銀、i は利子率である。地主にとつては R を極大ならしめること、従つて平均生産費を極小ならしめることが目的である。いまこの平均生産費を π とおけば、それは次の式によつて示される。

$$(2) \pi = \frac{1}{q} (n_1 + n_2 + \dots + n_n) + R$$

生産物總量と充用労働者數との關係を示すものとして次の生産函數が與へられる。

$$(3) q = F(n_1, n_2, \dots, n_n)$$

かくて π を極小ならしむる條件が次の如き形で與へ

10) Wicksell; Lectures, p. 24.

11) Schumpeter; Entwicklung, S. 35.

シユンペーター; 「本質」木村、安井氏譯 366-367 頁。

られる。

$$\begin{aligned}
 & 0 = \frac{\partial \pi}{\partial n_1} = \frac{\partial}{\partial n_1} \left\{ \frac{1}{q} (n_1 + n_2 + \dots + n_n) (1+i) \right\} \\
 & \quad = \frac{1}{q} \left\{ (1+i) \right\} - \pi \frac{\partial q}{\partial n_1} \\
 & 0 = \frac{\partial \pi}{\partial n_2} = \frac{\partial}{\partial n_2} \left\{ \frac{1}{q} (n_1 + n_2 + \dots + n_n) (1+i) \right\} \\
 & \quad = \frac{1}{q} \left\{ (1+i) \right\} - \pi \frac{\partial q}{\partial n_2} \\
 & \dots \\
 & 0 = \frac{\partial \pi}{\partial n_n} = \frac{\partial}{\partial n_n} \left\{ \frac{1}{q} (n_1 + n_2 + \dots + n_n) (1+i) \right\} \\
 & \quad = \frac{1}{q} \left\{ (1+i) \right\} - \pi \frac{\partial q}{\partial n_n}
 \end{aligned}
 \tag{4}$$

しかるに均衡においては、 $P = \pi$ であるから(4)は次の如く書改められる。

$$\frac{\partial q}{\partial n_1} \frac{1}{1+i} = \frac{1}{P}; \quad \frac{\partial q}{\partial n_2} \frac{1}{1+i} = \frac{1}{P}; \quad \dots; \quad \frac{\partial q}{\partial n_n} \frac{1}{1+i} = \frac{1}{P}
 \tag{5}$$

最後の方程式はいふまでもなく、勞銀が勞働の割引せられたる限界生産力に等しいといふことをあらはす。さうして(1)は地代が前貸されぬといふリカードの見解の端的な表現であり、(2)は地代が生産費の中に含まれぬといふ命題をあらはし、(3)は土地收穫遞減の法則をあらはし(普通にこれが例へば $r = r(n)$)として把握さ

差額地代と限界生産力説

れてゐるが、これはもとよりリカードを眞に理解する所以ではない。(5)は最後に投下せられた資本が何等地代を收めないといふ命題をあらはす。更にまた土地の差等が完全に連続的であるとすれば、さうして n 番目の土地が最劣等であるとするならば、(5)における $\frac{\partial q}{\partial n_{n+1}} = \frac{1}{P}$ は最劣等地に地代なしといふリカードの命題³⁾をあらはし得るであらう。かくて吾々はリカードの差額地代論は右の方程式(1)(5)によつて定式化されるものと考へる。⁴⁾ 方程式数は(1)が一個、(5)が n 個であり、未知數の數は R が一個、 n_1, n_2, \dots, n_n が n 個であつて、方程式の數と未知數の數とは一致するが故に、これで問題は解ける。換言すれば地主にとつて總地代と雇傭勞働者數とが一義的な大いさとして與へられるのである。いま利子が勞銀の中に含まれるものとして、これを蓋然的な幾何學的圖形にあらはせば、次の如くである。⁵⁾

圖の斜線の部分の總計は普通に「第一形態の差額地代」と稱せられるものである。

1) Barone; Grundzüge der Theoretischen Nationalökonomie. 1927. S. 67-68.
 2) Ricardo; ibid., p. 49. 邦譯 52頁。
 3) Ricardo; ibid., p. 48. 邦譯 51頁。
 4) Wickcell; Über Wert, Kapital und Rente, 1893, S. 126. 北野氏譯 207-208頁。
 5) Weinberger; Mathematische Volkswirtschaftslehre, 1930, S. 93. 160.

更に現實に近づくために、地主の所有する各種の土地の量が均等であるといふ假定を放棄すれば、次の如き諸方程式が成立する。

$$(1) T_{rk} = (n_{1k} + n_{2k} + \dots + n_{mk}) (1+i) \quad 1 + R_k$$

($k=1, 2, \dots, m$)

$$(2) q_k = F_k(n_{1k}, n_{2k}, \dots, n_{mk}) \quad (k=1, 2, \dots, m)$$

$$(3) \frac{\partial q_k}{\partial n_{1k}} \frac{1}{1+i} = p; \frac{\partial q_k}{\partial n_{2k}} \frac{1}{1+i} = p; \dots$$

$$; \frac{\partial n_{1k}}{\partial n_{1k}} \frac{1}{1+i} = p$$

$$(4) \sum_{k=1}^m (n_{1k} + n_{2k} + \dots + n_{mk}) = A \quad (k=1, 2, \dots, m)$$

$$(5) K = Al$$

方程式数は、(1)(2)が各 m 個、(3)が m 個、(4)(5)が各一個であつて、合計 $(m+2m+2)$ 個であり、未知数の数は、 R, q が各 m 個、 n_1, n_2, \dots, n_m が m 個、 l, i が各一個であつて、合計 $(m+2m+2)$ 個である。かくて方程式数と未知数の数とは一致するが故に、問題は解ける。

最後に地主が企業者であるといふ假定を放棄す

ば右に定式化したりカードの地代論は直ちに眞個の近代理論的形態に移り行く。即ち、企業者の数を m' 、彼の生産する穀物量を q' 、彼の充用する労働者数を a 、同じく土地面積を b_1, b_2, \dots, b_n 、労働の生産係数を a 土地のそれを b_1, b_2, \dots, b_n 、その國民經濟における總土地面積を B_1, B_2, \dots, B_n 、同じくその單位當りの地代を r_1, r_2, \dots, r_n とすれば、次の如き諸方程式が成立する。⁸⁾

$$(1) P = (a_1 + b_1 r_1 + b_2 r_2 + \dots + b_n r_n) (1+i)$$

$$(2) q' = \varphi(a', b_1, b_2, \dots, b_n)$$

$$(3) \frac{\partial q'}{\partial a'} \frac{1}{1+i} = p; \frac{\partial q'}{\partial b_1} \frac{1}{1+i} = r_1; \frac{\partial q'}{\partial b_2} \frac{1}{1+i} = r_2; \dots; \frac{\partial q'}{\partial b_n} \frac{1}{1+i} = r_n$$

$$(4) a m' = A; b_1 m' = B_1; b_2 m' = B_2; \dots; b_n m' = B_n$$

$$(5) K = Al + B_1 r_1 + B_2 r_2 + \dots + B_n r_n$$

$$(6) a = \frac{a'}{q'}; b_1 = \frac{B_1}{q'}; \dots; b_n = \frac{B_n}{q'}$$

方程式数は、(1)(2)(5)が各一個、(3)(4)(6)が各 $(m+1)$ 個であつて、合計 $(3m+6)$ 個であり、未知数の数は、 m', q', l, i, a が各一個であり、 $b_1, b_2, \dots, b_n, b_1', b_2', \dots, b_n', r_1, r_2, \dots, r_n$ が各 n 個であつて、合計 $(3n+6)$

8) 高田博士；利子論、266—271頁参照。

個である。方程式數と未知數の數とは一致するが故に、これで問題は解けるのである。なほ右において n 番目の・假定によつて最劣等の・土地に地代が生ずることになつてゐるのであるが、これは何等事の本質に關することではない。リカードにおいて最劣等地に地代なしといふ命題が成立するのは、土地の差等が完全に連續的であるといふ特殊の假定に基くものであるといふことは、吾々の既に指摘したところである。

五

さて既に述べたやうに、吾々が以上において所與であるとしたところの地代を含む穀物價格は、リカードにおいてはそれが地代を含まざる生産費によつて定まらねばならぬ。このことを論證しなければ、地代論の展開はリカード自身としては全きを得ないわけである。しかしこの論證が本來不可能であることは容易に見得るところであらう。何となれば、既に述べたやうにリカードの價值論は地代を問題とするや否や倒れねばならぬからである。従つてリカードにおいては右の

論證は必然に自己の價值論の否定でなければならぬ。

曰く、「穀物の價格は地代を支拂はぬ土地において、もしくは地代を支拂はぬ資本部分を以て生産を行ふ場合の、其の生産に投ぜられる勞働量によつて規制せられるものである¹⁾」と。リカードはこれによつて事實上穀物價格が地代を含まざる生産費によつて定まることを意味せしめてゐるのであるが、しかしこの言葉は何等正當なる意味を含むものではない。何となれば、それは穀物價格が限界的な勞働の生産係數の大いさによつて定まるといふこと以外の何ものをも意味しないからである。限界的な勞働の生産係數が生産物價格と何等直接に關係しないことは餘りにも明瞭であり、リカードは事實上こゝで平均的な勞働の生産係數と限界的なそれとを混同してゐる。従つてこの限りにおいても既にリカードは自己の價值論を否定してゐるわけである。他方において、リカードは穀物價格の騰貴によつて地代を説明しなければならぬのであり、そのためには彼は穀物それ自身の勞働の生産係數の増大を以てし

1) Ricardo; *ibid.*, p. 51. 邦譯 55頁。

なければならぬといふことは、吾々の既に述べたところであるが、この關聯はリカードにおいては次の如く述べられてゐる。「一切の財の交換價值は、その製造品になると鑛産物なると土地産物たるを問はず、常に……最も不利なる事情の下に生産を繼續する者によつて必然にその生産に投下さるべき、より大なる勞働量によつて規制せられる。茲に最も不利なる事情とは、生産物に對する需要に應ずるためには、なほその下に生産を行ふことを餘儀なくせしめられるその最も不利なる事情を意味する。」と。この敘述はこれを何等かの正當なる意味に解するものとせば、たゞ生産物價格が最劣等企業の平均的な勞働の生産係數によつて決定されるといふ意味に解するより外はない。さうするとこれによつて普遍的な自由競争を前提するリカードの價值論の基礎が震撼されることになる。さうしてまたかゝる最劣等企業の生産費が地代を含まないといふことは、如何にしても論證せられ得る事柄ではない。リカードがその價值論と地代論とを調和せしめんとする試

みが、結局價值論の否定に終つてゐることは明らかであらう。

最後に右の二つの引用句の中の第一のものは、價值論との關聯を切離して考ふるならば、生産物價格が限界生産費において定まり、そしてそれが平均生産費に等しい（もとよりこの際地主が企業者であり、従つて費用が勞働のみであるといふ假定が守られねばならぬ）といふ意味を含むものとして、近代理論的に救濟され得るが、しかしこれがリカードの主張の眞の方向でないことは引用句の第二のものを併せ考ふることによつて自ら明白である。要するにリカードの價值論と地代論とはその據つて立つ理論的平面を異にする（勞働の生産係數の固定性と可變性）、従つてその間には如何なる架橋も本來不可能である。吾々のこゝで言はんとするところは、たゞこのことにすぎない。

2) Ricardo; *ibid.*, p. 50. 邦譯 53 頁。